

なの顔を照らしていました。母が明りを持って波の様子を見に階段の所にいくと、わずか三メートルぐらいしか離れていないのに真暗になり、みんなだまったままでした。すぐに母がもどり「階段の上近くまで波が来とる」と言い、祖母が「もうあかんやわからん、死ぬんやったらみんな一緒や、手つないで離すなよ」と言い、七人が輪になって手を握り合いました。

ローソクの明りもいつの間にか消え、真暗闇の中でヒタヒタと波の走る音だけが聞え、ドーン、ドドーンと家に何か打ち当たる音が数回続いて聞えたと思った瞬間、突然家が崩れるように倒れ、家に押し潰されるようにしてみんなが水中に押し込まれました。

私は水中で天井に頭を抑えつけられ、いつの間にかつないでいた手を離し、必死になって天井板を突き破ろうと海水を呑みながらもがいていたところ、急に頭の上が軽くなって、壊れた家の梁や柱にまたがった格好で水面上に胸まで浮き上がりましたが、近くにいたはずの家族の姿が一人もみえず無我夢中で水の中をさぐり、手にさわったものを引張り上げました。幸いにも弟や妹たち三人は間近におり、祖母は少し離れて浮き上がっていましたが、母と叔母の姿は見当たりませんでした。

真暗闇の中で浮いている不安定な壊れた家の木材にまたがって、胸近くまで海水につかった状態であり、祖母に「動くとき危いからそのままでおれ」と言われ、みんなでこのまま夜明けを待つことにしましたが、海水につかって

いるので寒いとは感じませんでした。

しかし私の着ていた学生服は、戦争末期に配給された荒い植物繊維のもので、海水を吸って肩にのしかかったように重く身動きがしにくいので脱ぎ、浮き上がっている梁の上を伝って前に建っている家に近づくと、ちょうど胸ぐらの高さに小庇があったので、そこに上着を置き、元の場所にもどって海中に座っていました。この間にも津波は満ち引きを繰り返していたようで、梁や柱が動き軋む音がしていました。

ふと気がつくとき少し波が引いたのか、さっきの家の窓が開いているのが黒くなって見えたので、座っていた梁を伝って近づき中に入れなかと足を入れてみたが、畳が濡れているのか足を乗せると沈み込むようなので、あきらめて再び元の所に戻りました。

いつしか暗闇に目が馴れてきて、私たちのまたがっている梁や柱は、元の我が家から七〇メートルぐらい上流の観音寺参道口の橋と、浜崎隆一さんの家の所にひっかかっていると分かりました。暗がりの中を見透かすように辺りを見回すと、観音寺川右岸添いの家並みは何事もなかったように建っているのが見え、左岸添いの我が家の付近のみが流されたようで涙がこぼれ、後を振り返ってもみませんでした。

こんな時に今日も何事もなかったかのように、一番列車の汽笛が何度か聞こえていました、次第に空がしらみ始め、足元が見えるようになり、「気を